

子ども・若者の学びと育ち、生き方を支援する ～フリースペースたまりばの実践から～

NPO 法人フリースペースたまりば理事長
川崎市子ども夢パーク所長、フリースペースえん代表
西野 博之

はじめに

私たちは、何らかの理由で学校に行きづらくなった子どもたち、不登校と言われる子や、引きこもりと言われる若者たちの支援を30年前から始めて、25年前（1991年）に「フリースペースたまりば」を川崎市高津区に開設しました。とにかく彼らと一緒に生きていく場をつくろうと、昼ご飯を一緒に作って食べることから始めました。そして多摩川で遊んだり、みんなで語り合ったり、勉強したりと、学校外でも育ち、学ぶことができる取り組みをしてきました。当時はNPO法もなく、なかなか世間に受け入れてもらえませんでした。

オープンして7年間は行政の敵と言われ続けた中で、ようやく私たちの活動に光を当ててくださったのが、忘れもしない若者のオルタナティブな活動を発見・応援する生活クラブ生協のキララ賞（1997年）でした。キララ賞の受賞者を、県知事と川崎市長につないでくださったことがきっかけで、青少年課長や教育委員会とコンタクトを持つことができました。その頃ちょうど川崎市で子ども権利条例をつくろうという動きがあり、市の教育委員会から、不登校や障害のある子の意見を代弁してほしいと呼ばれ、そこから流れが大きく変わっていきました。

1998年に「川崎市子ども権利条例」の具現化を目指した調査研究委員会世話人の1人に迎えてもらいました。条例づくりの後、条例制定記念として「川崎市子ども夢パーク」という青少年教育施設をつくることにも関わりました（2001年）。2003年に開設してからは、法人を取得した「NPO法人フリースペースたまりば」が、夢パーク内に設置した「フリースペースえん」の運営を受託しました。ここの特徴は生涯学習（社会教育）の視点にたって、不登校児童・生徒などが学校外で多様に育ち・学ぶ場としてスタートしたことにあります。

そして2014年には川崎若者就労自立支援センター「ブリュッケ」を開設し、川崎市内で生活保護を受給している引きこもり傾向の若者たちの就労自立支援事業を受託しています。

ストレスを溜め込む子どもたち

川崎では悲しいかな、2015年2月20日に大変ショッキングな事件が起きてしまいました。同年1月から不登校になった当時中学1年の上村遼太くんが、事件当日深夜、真っ暗闇の中、多摩川の河川敷で、裸にされて泳がされ、上がってきたところをカッターで首を中

心に40数カ所切り刻まれ、亡くなりました。

この事件の有識者会議専門委員会メンバー（7人）として、私も検証に当たらせていただきました。われわれ専門委員会が出した提言は、とにかく子どもに居場所が必要であることでした。遼太くんの居場所はどこにあったのか。家庭だったのか、地域なのか、学校なのか。彼はどこにも行けるところがありませんでした。

さらに17歳、18歳の川崎市在住で市立高校定時制を中退したりした若者たちが、殺人犯になってしまいました。「オギャア、オギャア」と生まれたときに「殺すぞー、殺すぞー」と言って生まれてくる子なんかいやしません。生育のプロセスの中で、そういう子がつくられていく。これは私たち社会の大人たちの大きな課題なのです。

広がる格差 子どもの貧困

今日の社会は、大きく社会格差が広がり二極化しました。6人に1人の子どもが相対的貧困にあると言われるようになりましたが、私たちが出会ってきている子どもたちの中には半端なく貧困状態にある子がいます。訪ねて行ったら、炊飯器を持っていない家庭がありました。布団を持っていない家庭がありました。6畳一間に5人で生活して、押し入れで寝ている子もいました。炊飯器のない子は、母子家庭でお母さん、娘ともに精神疾患でした。重度の鬱であるお母さんは寝ているしかない。だから子どもに何とか食事を作ってあげたいと思っても、ご飯を作ってあげることすらできない。世間ではネグレクトだ、虐待だと騒ぐかもしれませんが、でもこのお母さんだって、何とかしてあげたいのにできなくて苦しんでいるわけです。「炊飯器持っている人いませんか」と呼び掛けたら、すぐに調達できました。お米を買って炊いたら、子どもが塩もかけていない白飯をすごくおいしいおいしいと言って、ボロボロ泣きました。生活保護を取れている家庭はまだいいんです。この社会は本当に絶対的な貧困も広がってきているように思います。

川崎市子ども権利条例

川崎で18年前に子ども権利条例をつくり始めたとき、今日認識されてきているようなストレスを子どもたちがいかに多く溜めているかということに出会いました。そうした中で子どもを一人の人間として、そして社会を構成する対等なパートナーとして位置付けようと、川崎市子ども権利条例がつけられました。そし

で第27条に「子どもの居場所」という次の条文がで
き上がります。

「子どもには、ありのままの自分であること、休息し
て自分を取りもどすこと、自由に遊び、若しくは活動
すること又は安心して人間関係をつくり合うことがで
きる場所（以下、「居場所」という）が大切であることを
考慮し、市は、居場所についての考え方の普及並び
に居場所の確保及びその存続に努めるものとする」。
さらにわれわれが頑張ってもう一項目付け加えられた
のが、「市は、子どもに対する居場所の提供等の自主的
な活動を行う市民及び関係団体との連携を図り、その
支援に努めるものとする」です。努力規定とは言え、
市はこうした活動をする市民団体にきちんと支援をす
るんだという内容が落とし込まれました。この条文を
基にできたのが、「川崎市子ども夢パーク」です。私た
ちは2006年から指定管理者として、3,000坪の敷地
の管理・運営に取り組んでいます。朝9時から夜9時
まで開いていますが、開設して12年の間に90万人を
突破しました。来年5月頃には100万人を突破する予
定です。

子どもの成長に必要なこと

屋外型の遊び場は、実は子どもたちの失われた自尊
感情や自己肯定感を高めたり、自信をつけてくるプロ
セス等で、非常に大きな影響を及ぼします。自由な発
想で、自由に遊ぶ。好きなだけ穴を掘りたかったら掘っ
ていい。その遊びの続きが明日できる。こうした遊び
と暮らしの主体を取り戻す取り組みをする背景には、
子どもたちが消費者にされてしまった悲劇があります。
与えられた教材をただこなし、覚えます。「テストでい
い点数を取りなさい」「努力しなさい」そして「勉強し
ないおまえが悪い、自己責任である」となります。遊
びだって高価なゲーム機を買ってもらって遊んでいる。
おとながつくった「遊び」で受動的に遊ばされている
だけです。人間というのは、道具と火を手に入れて、
成長、発達してきた生き物であるにもかかわらず、私
たちは子どもたちからそれらを奪った社会を厳然とつ
くり出しているのです。

それから、安心して失敗できる環境づくりも重要だ
と考えています。いま世の中では、大人たちが子ども
にけがをさせないように、失敗させまいと思って、先
回りした子育て環境をつくる中で、子どもたちがあま
り失敗を経験していません。実は不登校から引きこも
りになっている人よりも、いい学校、いい大学を出て
から引きこもる相談のほうが、私にとってはずっと多
いのです。彼らは常に失敗を恐れ、大学や職場でちょ
とした失敗がきっかけになって、外に出られなくなっ
てしまう人が少なくないのです。

また、引きこもっている人の中に、ゼロ100タイプ
という人が多く見受けられます。つまり完璧主義なん
ですね。何でもかんでも100点取らないと自分が許せ
ない。あるいは、生育のプロセスで親からそう言われ
続けてきた。親も完璧を求め過ぎる人が鬱っぽくなる
傾向が見受けられますが、どこかで失敗を重ねながら、

「できない、こんなの分かんない、もうしょうがな
いじゃん」って開き直れる、根拠がないんだけど自信
を持っている子のほうが、よほどこの社会は生きてい
けるんです。不完全な自分を受け入れられる力という
のも大事なことです。正しい模範的な力強い大人像を示
し過ぎても、子どもは元気になりません。うちのスタッ
フたちの中にも、どこかズッコケている人がいっぱい
います。でき過ぎた大人ばかりがそばにいても駄目
なんですね。

SOSをキャッチするには胃袋をつかむ

いずれにしても、地域に遊び場や居場所があること、
そしてそこに常時アンテナがたった感度のいい大人が
いることで、子どものSOSがキャッチできます。これ
が先ほどの川崎で起きた事件の検証会議の中で、市長
に提言した子ども食堂づくりの一つの発端になってい
ます。私が第1回子ども食堂全国サミットの基調講演
をさせていただいたのは、たまりばで25年前から毎
日ずっとお昼ご飯を作って食べてきた取り組みがあっ
たからです。

まずは子どもたちの胃袋をつかむことが大事です。
夜に外の焚き火でわざとインスタントラーメンを多め
に作っていると、腹をすかせた若者たちが集まってき
て、「ずるいじゃん、ちょっとちょうだい。腹減ってる
んだよ」と叫ぶ。「やだね、これ俺たちの夕飯だもん」
と返すと、「いいからくれよ」と言います。「しょうが
ないなあ」といいながら少し分け与えると、顔も変わっ
て、急にいろいろな話が出てくるんですね。「きのうお
やじが酒飲んであばれて、かあちゃん殴ってた。まじ
殺してえ。彼らは「困った子」ではなくて「困ってる子」
なんです。この子たちをどうやって救っていくか、関
わりを持ち続けるかということがいま問われています。

「困ってる子」の居場所がない社会

公的機関の不登校対策施設は、障害のある子はほと
んど受け入れられません。発達障害や知的障害があったら、
特別支援のほうに行ってくださいとなります。鬱病、
パーソナリティ障害や統合失調症も含め精神疾患があ
ったら、まず受け入れられません。「フリースペ
スえん」には、身体障害で食事介助付きの人も含めて、
いろいろな障害のある人とともに居場所づくりをして
きました。

そして今回川崎で起きた事件ではっきりしたように、
なかなか非行傾向の若者を受け入れる公的な教育機関
もありません。福祉領域には、むかし教護院と言われ
た、児童自立支援施設などが用意されていますが。私
たちは、こうした子たちも受け入れる場をつくろうと
取り組んできました。さらに経済的な問題もあります。
日本全国のフリースクールの平均月謝は3万3000円
だそうです。貧困が進み、そんなお金を払える家庭は
そうはないということで、私たちは無料で来られる場
所を行政と一緒につくってきたのです。

そして、高校進学後も来られるようにしたことで、
さまざまな年齢層の人たちが来ます。もう今は10代

で出産した子たちが赤ちゃんを連れてきます。中には40代で何事にもこだわりが強く、一般就労の難しい人たちも来ています。開設して10年以上経って、いつの間にか障害者手帳を持っているとか、診断名がついている人が5割近くになりました。この社会というのは、こういう人たちの行き場がないということがはっきりしてきます。生活困窮家庭の人たちも2割を超えています。

その子に合った支援

近頃は「学校に復帰できるようにさせます」という取り組みが増えてきました。だけど、そんな看板を出して、その目的が達成できなかったら、その子はさらに自己肯定感を下げます。ゆるやかなフリースクールにいたのに、結局学校に戻れないと、「やっぱり俺、駄目じゃん」「私、劣ってるじゃん」って話になる。私たちは学校に戻る戻らないは結果の一つであって、目的ではないという立ち位置です。とにかくまずは君が生まれてきただけで、生きてるだけで奇跡だよっていうことを大事にしてください。とにかく命が真ん中にあります。

支援は本当に誰のためなのか、誰の利益なのかを考えていかなければならないと思います。「困ってる子」に普通の人ができるような力を身につけさせようとして、全て満遍なく力をつけていこうという支援が多くなる中で、私たちはその子に合った支援とは何なのかということを考えています。それは、その子が得意としている「強い」ところをしっかりと引き上げていこうと、その子に寄り添う取り組みです。多動の子が広い夢パークの中を走り回って好きなだけ木片にペンキを塗っている。みんなが「わあ面白いな、おまえの色の使い方」と言われている間に、どんどん情緒が安定していきます。そこからいろんな力が発揮されていきます。

それから、まったくと過ごすことができる環境も大切です。ゲームをしている時間の中で「おれ何やってんだろ、駄目じゃん」と自分を責めながら、自分をごまかしているのかもしれない。こうした時間を保障していくを通して、子どもが何かをやりたい、自分でもやらなきゃという気持ちが芽生えてくるのを待つのです。無駄にしているように思える時間にも、成長のきっかけが隠されています。その子が安心して自分と向き合える時間を用意していくと、また自分の足で歩き始めるのです。

これまでの経験をベースにした就労自立支援

「ブリュッケ」は、川崎市健康福祉局自立支援室から依頼された、生活保護を受給している15歳から29歳までの子どもたちの就労自立支援事業です。始めてたった1カ月で、生活保護のケースワーカーから50件の相談が持ち込まれました。それらは本当に困難な引きこもりのケースがたくさんありました。これでもかという複雑に絡み合った、ジェノグラム（家系図）も書けないくらい複雑な人間関係の中で暮らしていたり、

ひどい被害に遭ってきている人も少なくありません。

まずその人が家から出て来られるようにするまでのアウトリーチも含めて、居場所につなげられるか、そして居場所につないでから緩やかに今度は就労につないでいけるのか、その「懸け橋」になりたいという思いでブリュッケ（ドイツ語）という名前がつけました。

ブリュッケでは、ミーティングをして、何を作って食べたいかを決めます。暮らしのイメージができてくると、子どもは元気になります。自分でも食事が作れるようになったら相当元気になっていきます。子どもたちは貧困の中でそんな関係性すらありません。ご飯を自分で作って食べられるものと思ってなく、コンビニ弁当しか食べていない人もいます。こうしたことから、自分でもできることを発見し、自己肯定感や自尊心を高め、そうした生活の中から社会で働くことに関心を高めます。これまでお話した「フリースペース たまりば」がやってきたことを通して暮らしを取り戻す、それから自己肯定感を取り戻すことをベースに就労支援につなげています。

地域社会との連携をすすめる

就労支援は一人ひとりオーダーメイドの寄り添い型になります。就労支援を通じて地域とつながり、地域を変えることで就労を変えるといった、出会いとドラマがあります。就労支援員の人たちが、哲学を持って会社やお店を経営している人を開拓します。それからうちにこういう子がいるんだけど、とにかくちょっと使ってみてくれないかっていうお願いをします。まずボランティア等をやらせてもらうなどをしながら、就労につながるような形を取っています。

生活保護のケースワーカーの人たちは、不登校、引きこもりに関する知識や理解がほとんど乏しい状況です。その人たちがどう対応していいかわからないまま、家からも出られず、貧困のまま放置されています。そこで、ケースワーカーの相談会や研修もはじめました。

居場所で子どもたちが好きなだけご飯を食べて、周りの大人たちの大丈夫という空気を手に入れた子どもたち。親から愛されたという実感や、愛着関係を持てなかったとしても、そこに関わる大人たちから「大丈夫」という安心の力がもたらされたとき、子どもはどんどん自分で変わっていきます。だから、学校復帰なんて言葉を使わなくても、今年も去年も一昨年もそうですけど、高校に行きたいと言った子は、全員高校に進学しています。それが正解かどうかはわからないけど、自分で選べるようになります。自ら就労する子どももいくらかもいます。なので「ブリュッケ」の経験を生かして、居場所の理念を大切にしつつ、「フリースペース えん」で過ごす年齢の高い人たちにも、就労の支援に少しずつ取り組んでいくことも考え始めています。

(にしのひろゆき)

